

リレーションシップバンキングの結果 メインストリートの銀行破綻が増大したのか？

茨城大学 内田 聡

アメリカの金融システムは、ウォールストリートとメインストリート（地域）の相互補完から形成され、前者が主に市場論理で機能するなかで、後者の本質は市場論理とコミュニティの要請を調和させるところにある。メインストリートの銀行は、市場経済での活動を基本としながら、政策・制度や慣行にも支えられている。一方で、金融危機後にメインストリートで銀行破綻が急増しているため、なにが起きているのかを明らかにしたい。

ウォールストリート金融はサブプライムローンと証券化によって信用膨張とその崩壊をもたらしたが、メインストリートの銀行（コミュニティバンク）にも、これに乗じて商業用不動産貸出に過度に傾斜し破綻したものがある。典型的なのは、ホームエクイティローンなどを通じる過剰消費で生み出された、建設・土地開発貸出にのめり込み、破綻した銀行だ。そして、投資銀行などによるブローカー預金という特殊な預金が、この貸出を可能にしていた。破綻コミュニティバンクの多くは、リレーションシップバンキングというよりは、不十分な管理能力のままトランザクションバンキング的な預金・貸出に傾いたきらいがある。

中小企業向貸出という側面で見ると、大規模・中規模銀行はクレジットスコアリングなどの活用で貸出を増大させてきたが、金融危機後はその反動で減らしている。コミュニティバンクは商業用不動産貸出の延滞に直面し、この減少分を補う余裕はなく、破綻の影響もあり中小企業向貸出を減らしている。しかしながら、5年間で30%増大したピーク時(08年)の残高を維持する必要があるだろうか。信用膨張による景気拡大に乗り、高いリスクを顧みずに高いリターンを追求していた、一部のコミュニティバンクや中小企業が淘汰されるのは当然の帰結である。一方で、景気後退で経営に影響を受けた、コミュニティバンクへの資本注入は、地域経済の安定性維持の観点から欠かせない。

金融危機後も、メインストリート金融の本質に変わりはなく、長期的な視野からなるリレーションシップをベースに、事業向貸出の供給を通じて、市場論理とコミュニティの要請を調和させるところにある。そして、この本質を踏み外したり、メインストリート金融を支える仕組みを自己保身だけに用いたりするものが、いずれ淘汰されるという側面にも変わりはない。

【参考文献】 内田聡「金融危機後のメインストリート金融」『日本政策金融公庫論集』日本政策金融公庫、71～96頁、2010年11月。